

# いま、学校で何が起きているか 教師はどう向き合っていくか



現場の先生方は、生徒の自己肯定感についてどのような印象をもっているのでしょうか。ここでは、「自己肯定感とは何か」という定義にはあまりこだわらず、先生方が日々生徒と向き合うなかで感じていることや、生徒にもたらしたいと思っていることを、自由に語り合っていました。

取材・文／松井大助 撮影／村田わかな

## 現状または 将来に 自信がない

「自分をダメだと思う生徒が  
学習や進路に後ろ向きになる」

**編集部** はじめに、自己紹介と勤務校の簡単な紹介をお願いしますか。  
**藤** 東京学芸大学附属高校の藤と申します。生徒の進路は国立大学への進学希望が一番多く、教員もそれをサポートしている進学校です。  
**黒瀬** 岡山県立林野高校の黒瀬と申します。中山間地域にある進学校ですが、高校の再編整備もあり、今は多様な進路希望に対応しています。  
**浦部** 都立青井高校の浦部です。生徒の進路は多様で、現在さまざまな取り組みで、進路未定者および中途退学対策にも力を入れています。  
**佐々木** 都立羽村高校の佐々木と申します。生徒にはやんちゃな子も多く、浦部先生の学校と同じで、中途退学対策も課題の一つになっています。  
**編集部** それぞれの学校で、自己肯定感が関係していると思われる、生徒の気になる言動はありますか。  
**浦部** 生徒のなかには「自分なんて」

「ムリだから」などと口にする子がいます。学校生活に十分向き合えず、遅刻や欠席を安易に増やす子もいたりします。希望校に受かったのに「フリーターがいい」と言い出した生徒もいました。自分を低く見積もってしまつた結果かもしれません。その子たちもつと自分の良さを認められるようにしていきたいと思っています。

**藤** 本校には今まで勉強ができた子が入学してくるので、入学時の自己肯定感が高い生徒が多いです。ですが、勉強で一番になれるのを味わうと、揺らぎます。「自分がない」とへこみ、「予習していないから学校に行けない」「僕は評価されなくていい」などという生徒も出てきます。自分はダメだと思う生徒の早期発見とサポートはどの学校でも必要だと思えます。

「自分を主張できない生徒が  
やりたいことをみつけられない」

**黒瀬** 「自分がない」とへこむというのは、どんな感じですか。  
**藤** 生徒のなかには、受験勉強で懸



羽村高校  
(東京・都立)  
佐々木彬人先生

担当教科は日本史、ソフトボール部顧問。校長や学年団および進路指導部とのチームで、生徒に目標をもたせる活動を推進。進路担当として昨年より大学進学に興味のある1年生への補習を始め、今年度より特別教室に拡充。



青井高校  
(東京・都立)  
浦部ひとみ先生

担当教科は英語、進路指導部主任。東京都の「企業・NPO等と連携した都立高校生」[社会的・職業的自立]支援事業]モデル校として体系的なキャリア教育プログラムを構築・実践中。東京都高等学校進路指導協議会事務局長。



林野高校  
(岡山・県立)  
黒瀬大亮先生

担当教科は国語、登山同好会顧問。1～3年の学年主任を歴任し、昨年度は進路課長も務める。今年度は、来年度に中国地区で開催される全国高校総体の登山競技準備担当に。前任校時代より地域のNPOとの連携も深める。

命に知識を身につけてきた生徒もいるんですね。ですが本校の授業や試験では、自分の意見を述べるなど「答えのない答え」もよく求められます。すると「学んだ知識から正解を言えればいい」と思っていた生徒は戸惑うんです。でも同級生には自分の考えをパツと言える生徒もいて、学校でも好きなことをみつけてどんどん進んでいく。そこに差を感じて「お勉強以外の自分が無い」とへこみます。そうした生徒は「間違ってもいいから言ってみて」と促してもなかなか自分を出せません。恥をかけない。その生徒たちが自分をどう出していくか、授業や部活動、委員会活動などで揺さぶりたいな、と思っています。

**黒瀬** 「正解を言わなければならぬ」というモノサシが身に染みてしまっているんですね。本校には、小・中学校で「自分は正解を言ったつもりが間違っていた」という苦い経験を重ねてきた生徒もいるのですが、そうした生徒は「正解がわからないならもう黙っていいよ」という姿勢になりがちです。ですから、藤先生の学校の生徒とタイプは違いますが、「答えのない答え」を表現するのはやはり苦手です。生徒はおおむね自分を肯定できているように思います。ただ、進路指導など

でその子の良さを深掘りしようとする、いいセンスがあるのに表に出せなかつたり、やりたいことを言語化できなかったりと、ぶあつい「岩盤」のようなものにぶち当たることがよくあります。

**佐々木** その点では、うちの生徒のほうが自分を出せる子は多いかもしれませんが。先生に反抗したりルールを破つたりして自分を誇示するという、少し間違った形ではありますが、夏休みに金髪で登校してきて、注意しても「なんでだよ、文化祭の準備にきたのに」と主張できる強さはもっているんです。生徒は「自分が認められる楽しさ」は知っているようなので、勉強面でもその認められる楽しさを味わわせてあげたいです。

**可能性を信じきれない生徒が  
進路に及び腰になっていく**

**浦部** 本校にも元気な生徒は多いですが、「まじめな」進路の話になると引いてしまうことはありませんか？自分に自信がなかったりするのかなあ、とも思うんです。

**佐々木** うちの生徒は、火がつくのは早いです。「先生、オレ、これをやりたい」と。ただ、親に向いていないと言われたとか、ちょっとしたことであき

らめることも多くて。すごく感じるのは、野球で例えると、9回裏2アウト一打逆転の場面で打席がまわつてきて、こっちは応援しようとした瞬間、「先生、代打」と引いてしまう生徒が結構いることです。「番いいところじゃないか、ダメでもいい、やつてみよう」と声をかけても尻込みしてしまう。そこはもつたいいな、と思います。

**黒瀬** 進学や就職で「この生徒はもうひと頑張りできるはずだ」「ちょっとしんどいけど挑戦させたい」とこっちは思うんだけど、当の本人が引いてしまうことはありますね。

**藤** 志望校の合格可能性がE判定でもあきらめずに伸びる生徒もいれば、あと半年頑張ればいけると経験則から思える生徒でも現状の判定が低いとあきらめてしまう生徒がいます。「今より伸びる自分」「頑張り続ける自分」というのを信じられるかどうか、そこが大きいと思います。

**他者とのよい出会いが少なく  
将来像をうまく思い描けない**

**藤** また、自己肯定感は、他者から自分のいろいろな面を認められて育つ部分も大きいですよ。うちの生徒には、なまじ勉強で評価されてきたことで、他者との出会いのなかで自信を育

むことをあまり経験していない子もいるんです。そうした生徒は、成績が落ちると自信も失います。だから、生徒が他者とかかわる場を増やしたいんです。勉強以外の自分の良さも発見できるように。

**浦部** 進路多様校の生徒も、他者との出会いは少ないと言えます。進路について「フリーターでいい」「どうせ何とかなるでしょ」という生徒がいるのですが、それは自分の知っている世界が、

9回裏2アウト一打逆転の  
ここぞの場面で引いてしまう  
目標をもたせて  
お互いに一生懸命になりたい

佐々木先生





東京学芸大学附属高校 (東京・国立) 藤 千恵先生

担当教科は国語、バレー部顧問。昨年まで発達障害や不登校など課題を抱える生徒支援委員会委員長を務める。今年度はいじめ防止対策委員会委員長。SSHやSGHアソシエイトの取り組みの一環で、安全教育にも注力。



「お勉強以外の自分」を  
みつけられずにへこむ生徒がいる  
自分をどう出していくか、  
そこを揺さぶりたい

藤先生

# 大人が子どもを潰していないか

**黒瀬** ぼくも地元でNPOにかかわっています。実はごく限られた空間でしかないということを知らないからなんです。この社会で自分がどのように力を発揮できるかわからないまま、現実に押し潰されている。ですから今の学校では、NPOや企業とも連携して、「子どもたちの将来を真剣に考えてくれる大人」との出会いの場を増やそうとしています。

ていですが、そうした団体にしても都会のほうがいっぱいあるんです。地域のさまざまな人と出会い、そのなかで生徒が肯定される、というのは、ほんのり目指すところですが、地方でその活動を広げようとする学校にその準備や運営の負担が集中してしまいかねません。学校だけではなく、地域全体で進めるにはどうすればいいのかをよく考えます。

「似合わない」「できるのか」の  
ひとことが生徒にふたをする

**黒瀬** 地域全体で進めたいのは、学校だけの取り組みでは効果が薄い、とも思うからです。例えば以前に、「勉強を頑張ってみたくなった」という生徒と、家に帰ったら机に向かって翌日ほどにそれを報告する約束をしました。学習時間は増え、本人も自信をもち始めました。でもそこで、保護者がうれしさから軽口で「似合わない」と声をかけてしまい、外れかけたふたが閉じたことがあるんです。保護者や生

徒と親しい地域の人は、好きな子にちよつかいを出すように、子どもに否定的な声かけをしてしまうことがあります。気持ちにはわかるのですが、そうした周囲も巻き込まないとなあ、と思うのです。

**藤** 本校でも、保護者が心配しすぎて生徒の自尊心を下げてしまうことがあります。三者面談で生徒は前向きなのに、保護者が「できないでしょ」と否定してしまったり。だから本校では保護者向けの講演会に力を入れています。そこに保護者がいらしてくださる、という点では、恵まれているのですが。

**浦部** 本校では保護者とのコミュニケーションがなかなか取れず、そこがまた悩みです。また、まわりの大人が「どうせできない」と決めつけることで、結果、子どもたちの可能性を潰してしまっている、と感じることがあります。本校の新教科「人間と社会(仮称)」(※)の授業では、高校1年生が「人間関係を築く」という大命題と向き合い、グループディスカッションや発表を通して理解を深めていきます。子どもたちのなかに秘められている可能性を信じて、大人があきらめずに自己肯定感を育んでいく姿勢が必要なのではないか、と思いますね。

先生たちが目の当たりにした  
生徒が秘めていた可能性

**編集部** 実際に生徒が自分を肯定できるように変わった例はありますか。

**佐々木** 前任の定時制高校で、手を焼いてきた生徒が、就職したいところができて「勉強したい」と言ってきたんです。一緒に試験対策をしました。が、成果はなかなか出ませんでした。でも彼は勉強を続けました。ぼくも力が入って。最終的に彼は合格し、そこから身だしなみも言葉遣いもガラリと変わり、時間やルールも守れるようになりました。オレは努力した、オレはできる、という自信がすごくいい方向に出たんだな、と感じました。

**浦部** バイク好きで整備関係の専門学校に進んだ子が、卒業後もよく来てくれたのですが、その子が言うんです。「高校時代は勉強で負けて悔しいと思ったことは一度もない。でも今は悔しくてしょうがない」と。専門学校に見学に行ったら一番前の席で必死に勉強していました。前は「勉強なんてしたくない」と言っていたのに。すごいと思いました。好きなことがみつかつて開花したんだなと。

**黒瀬** 中学校はほとんど行っていない、話すのが苦手な、でも学力は高い女の



黒瀬先生

## いいセンスがあるのに 自分を出せない子がいる 学び合いや協働で良い面を掘り起こしたい

子がいました。その子も含めてクラスで「伝える」「しっかりと聴く」というルールで学び合いを進めたら、彼女と組んだ元気な男子が「○○さんのおかげでわかった」とよろこんで。そのうちに彼女はしゃべれるようになり、生徒会長に立候補するまでになりました。ここにいい、と安心できると、生徒は自分を出せるし、結束も強まると感じました。

**藤** 自己肯定感が高い生徒に引っぱられて集団が変わることもありますよね。本校には、1年生で妙高山に登るという伝統行事があるのですが、ある年に、女子隊が時間内に山頂に着けそうになく、断念するかという話になりました。その時に、ある生徒から「私たちは絶対に行ける」という声

があがり、その雰囲気はほかの女子にもわつと伝播したんですよ。途中で帰される恐れもあったのに彼女たちは挑戦し、登りきりました。「どうせ私は」と自己否定しがちな子にとっては「私は頑張れる」と思えるようになっていい体験だったと感じています。

### 他者とのかわりを通して 自己肯定感を育めるように

**編集部** 生徒の自己肯定感を意識して実践していることはありますか。

**藤** 安全教育に取り組んでいます。1年生全員が3時間の救急救命講習を受けた。生徒が成人するころに東京オリンピックがあるわけですが、目の前の人倒れても、状態を確認

することや、応援を呼ぶこと、胸骨圧迫や人工呼吸で心肺蘇生をすること、AEDを使うことなど、何か一つでもできることがある自分になってほしいんです。そのために実習にどれだけ真剣に臨めるか。学習能力は高いけれどモジモジしやすい生徒にとって、安全教育は、体を動かして必ず他者とかかわることを練習する、よい機会になると考えています。

**黒瀬** 「生徒が他者のために何かをすることで自分を見つめ、自分を出していく」という試みをしています。例えば国語で『城の崎にて』を学ぶ時、まずは協働学習で小説のテーマの生死についてみんなで考えます。そのあとで生徒が、感想文ではなく、大切な人にこの小説を紹介するための文章を考えるのです。そうすると、おざなりな態度を取りやすい生徒もかなり真剣に考えます。たぶん人は、自分のためよりも、他人のためのほうが頑張れるんですよ。問題を抱え、自分を大事にできなくなっているような生徒には、そうしたアプローチのほうが良い

と感じています。

### 自分は頑張れるという 実感を取り戻せるように

**佐々木** 担当教科の日本史で、生徒に記述をさせて最後にぼくが見るところをしています。暗記科目と違ってほしくないのと、勉強で認められる楽しさを知ってほしいからです。昨年度に始めた時は書けない生徒が大半でしたが、今では自分の記述を見てほしくて生徒がほくの前に並びます。校長や学年団の先生方と、個々の生徒に目標をもたせる取り組みも進めています。そのなかでほくは、大学進学に興味のある生徒を集めた特別教室を開いています。目標に向かって一生懸命になる体験を共有したいです。その子たちの進路意識が高まるにつれ、ほかの子も進路をよく考えるようになります。まわりへの効果も感じています。

**浦部** さまざまな大人と出会うキャリア教育のほか、NPOの大学生と本校教員とで年20回ほどの土曜日の補習講座も行っています。本校には勉強で躓いた経験のある子や必ずしも大進学学ではない子も多いですが、基礎学力を身につけるのに、進学希望も就職希望もありません。「休日に自分から勉強にくるのはすごいことだ、プラ



浦部先生

## 「自分なんて」という生徒も 本当は「頑張りたい」 そこを教員が信じて、 気づかせ、育てたい

イドをもつていい」とも伝えていきます。細々と始めたなら反響を呼び、3年めの今年は1年生240名中74名が登録しました。その子たちのために夏休み4日間の講習を組んだら、生徒が「すくなっ」と言っただけですよ。どの生徒にも本当は「頑張りたい」気持ちがある。教員が生徒のなかの可能性、「あきらめていない」という気持ちを感じ取り、育てていけるような取り組みを進めていきたいと思っています。